

令和2年4月17日

## 音楽の力・・・

前は、校内の風景をお届けしました。

今日は、少しエッセイ風にまとめてみます。

かつて、笠間市にある県の教育研修センター教育相談課というところに勤務していた頃、岩宮恵子さん（島根大学人間科学部心理学コース）の『思春期をめぐる冒険—心理療法と村上春樹の世界』という作品に出会いました。その中で、小説を書くことが「多くの部分で自己治療的な行為である」（『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』）と語る村上春樹さんの捉え方に焦点をあて、心理療法の現場から村上作品を読み解く視点は、当時、思春期の皆さんや保護者の方々との日々の相談業務の中で右往左往していた私に多くの示唆を与えてくれました。

村上春樹さんは小説の中でしばしば「井戸に降りていく」という表現をとるのですが、例えば、『ねじまき鳥クロニクル』での笠原メイが井戸の中で感じ考えることは、その当時、私が毎日出会う一人一人のクライアントのイメージを膨らませていくことにとっても役にたちました。

さて、村上さんにはこのような小説ばかりでなく、エッセイに類するものもいくつかあります。「小説を書くことが自己治療的な行為である」とする村上さんらしく、それらのエッセイの中には、私にとって大きな癒やしとなっているものがあります。その中の一つが『村上ラヂオ2』のなかに収められている「ベネチアの泉今日子」。このなかで、村上さんは、とても辛い状況の中、「異国の地」ベネチアで「ヘッドホンで繰り返される泉今日子の歌」を聞いたことに触れています。それが何であるかは明記されていません。「なんてったってアイドル」だったかもしれないし「木枯しに抱かれて」だったかもしれません。いずれにしても、村上氏はこの場で泉今日子の音楽を必要とした、ということのようです。

私にとっても、トランキライザーのようなこういう音楽はたくさんあります。昔、それほど心に沈潜することのなかったモーツァルトの諸作品、とくに晩年のピアノコンチェルトなどは、聴くほどに、村上さんの作品のごとく大きな癒やしとなっています。

先が見通せない日々が続きますが、皆さん一人一人がこの時期に出会う音楽が、これからの皆さんを支えてくれることを祈っています。